

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第485号 2022年8月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

現地へ出向いて、話を取材して 落合 静男

卒業式で校長が式辞を述べることを私は楽しみにしていた。それは、ある年から著名な人物の紹介をする事を考え付いたからでもある。ポイントが、実績を上げた理由を述べて、子ども達にヒントを思い出されると思ったからである。

例えば、「野茂英雄投手」は、米大リーグで活躍して日米通算で二百勝（日本七十八勝、大リーグ百二十二勝）を達成した。そこで、大阪の友人に出身の小中学校を調べてもらった。大阪市港区の池島小、池中、成城工高と分かった。そこで、大阪に行き小中学校の頃に夢を見る野球少年で、練習したグラウンドを見た。近所の人から

「なんでもよく食べて、物をあまり言わなかった」と聞き出した。さらに、地下鉄深江橋で降りて、成城工高へ行き、高校大会で優勝した時の盾が飾られており、写真に納め、教頭先生から当時の野茂の様子をお聞きした。活躍した時の新聞や資料や写真を示し「トルネード投法」で投げ続けた時の熱い気持ちを伝えていただいた。「自ら練習を進めた」「監督やトレーナーに恵まれ」「メジャーで新人王、ノーヒットノーランを二回達成した」。その後、私の生涯の楽しみみの古墳や寺社の見学を充実して行えた。

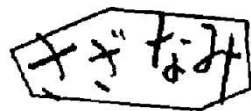
次の年に、世界の五大大陸の最高峰を全て登頂した「植村直己」を紹介した。兵庫県の日高町の七人兄弟の末っ子で育った。有名になったのは、北極の氷原を犬ぞりで行き抜く場面である。家で牛の世話をよくした。植村氏が卒業した府中小、寺、生家、よく遊んだ円山川の河川敷をタクシーで回った。春には珍しく雪が十五センチメートルも積もっていた。冒険館で衣服やソリを見て「自分で決めたことに努力出来る人」とキーワードを知った。

さらに、小説家の「司馬遼太郎」が『空海の風景』『竜馬がいく』『国盗り物語』『翔ぶが如き』を執筆し、私も楽しく読んだ。東大阪市の司馬遼太郎記念館で天井までの本棚に蔵書四万冊が収納されていたのでびっくりした。

さらに、明治の岩倉使節団の一員としてアメリカ留学をした津田塾大学の津田梅子の小平市の墓。

次に、「芥川龍之介」は、墨田区の両国に住んで回向院の隣の江東尋常小・一高・東大を出た小説家。田端文士村記念館や住んでいた家や染井霊園、神奈川の近代文学館などへ出向いた。『杜子春』『鼻』『蜘蛛の糸』の作品を紹介した。

十七年間で何人も紹介出来た。
 （社会科勉強会・六代目会長）



▼川端康成『雪国』は、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」から始まる。この書き出しが頭に浮かんだのが知人から、朝、お母さんと離れることが困難で大泣きしていた男の子が、今は、晴れやかな顔で登校しています。「これだけでも、子どもも岡さんも先生も大変だったろうなということに容易に想像することが出来ます。しかし、ベテランの先生はあわてません。メールは続く▼「今、トンネルの中にいるけど、出口があるからね。今、どの辺？」と聞きながら励ましました。「この辺」と指し示す場所が、入り口付近、半分、四分の三と出口に近づき、五月の終わりの運動会を境に、出口に最も近づきました。

「トンネルを抜けられてよかったね。トンネルを抜けたら入り口のとより、心がこんなに大きくなっていくよ。」と言うと、大きくうなずいていました▼「トンネル」に入った時は真っ暗で不安。しかし、前へ進めば、必ず出口がある。出口は、明るい未来と思えば希望が見えます。大人にとっても迷った時、役立つ言葉▼メールの結びは「トンネルは、自分を客観的に見る機会であり、次の自分に切り替わるための自己決定の機会になっています。」でした。

（吉永幸）

一番に伝えたいこと
弓削 裕之

「お父さん、カナブンとんだ。」
私が仕事に出かける直前、近くで寝ていた5歳の息子が、ねぼけまなこでそう言った。部屋の中にカナブンが飛んでいるのかと思いを探してみたが、どこにもいない。「カナブン、とんだの。」
と返してみると、
「動かへんかったけど、ふた開けたらとんだ。」
と、言葉を探しながら答えた。どうやら、虫かごに入れていたカナブンの動けなくなり、死んでしまったのではと心配していたら、うれしく、起きて一番に「カナブンとんだ」と報告したのだろう。出来事が起こった順序通りではないので、この言い方は事情を知らない父には伝わらない。しかし、息子が伝えたいことを順番に並べた時、一番は「カナブンとんだ」だった。
学校では、子どもたちがいろいろな出来事について話しに来る。相談の時もあれば、ただ「伝えたかっただけ」という時も多い。話の全容が見えにくい場合もあるが、子どもの話に頷きながら耳を傾けていると、少しずつ原因と結果が明らかになっていき、順序が見えてくる。ゆっくりと自分の言葉で話すことができた時、子どもたちは満足そうな表情をしてにこにこ帰っていく。
ただ、自分自身を振り返ってみると、決して穏やかに子どもたちの話を聞ける時ばかりではない。その相談や報告に来た際、(一刻も早く解決した方がよい)というこちらの思いから、焦った関わり方を

してしまふ時がある。
「先生、Bさんに嫌なことをされました。」
例えば、そうAさんが相談に来たとする。まずは起こった出来事をはっきりさせるために、「いつの出来事ですか」「どこでありましたか」「どんなことを言われたのですか」などを確認する。確認するにも同じようなことを確認すると、BさんもAさんにされて嫌なことがあったと言う。そんな時に私は、「どうしてされたことしか言わず、自分がしたこと黙っているのですか」と、子どもを追いつめてしまうこともあった。そして、そうやって長い時間をかけて「事実」を確認している間は、ずっと置いてけぼりになっていた。
子どもたちが「ごめんさない」「いいですよ」を伝え合い、話し合いが終わった後、ふと「Aさんが一番に伝えたいことは何だったのだろう」と思い返してみる。Aさんは、悲しかった気持ちを伝えたいだけかもしれない。本当は自分がしてしまったこともよく分かっていて、それでも「一番に」伝えたいことは、自分の悲しい気持ちだったのかもしれない。私があんな時「悲しかったね。辛かったね」とAさんの気持ちを理解してあげられれば、Aさんは、自分から全てを話すことができたかもしれない。
カナブンを逃がした息子が、毎朝、起きたらすぐに「カブトムシ見てくる」と玄関に駆けていく。今度はどうなことを伝えてくれるだろう。「一番」の言葉を、楽しみにしている。
(京都女子大学附属小学校)

オシャレ作文に挑戦だ！
高木 富也

作文・日記指導を日々行っているが、本学級の合言葉は、「オシャレ作文」だ。岩下修先生の『書けない子をゼロにする 作文指導の型と技』(明治図書)を参考に、諸先輩方の助言を加えて、実践に合わせながら実践している。作文のポイントをもとめたものを、ポイントで示したり、五感を意識できるように絵で表したりしながら、視覚的に作文の型と技を理解させる。日々の何気ないことや、学習や生活のふりかえり、行事など、何かあるたびに作文・日記を書いている。年間計画は、「1学期『書くことを習慣化する。』2学期『オシャレな表現に挑戦する。』3学期『全員が自分で判断して技を使いこなす。』である。今年度3年生の、1学期時点でのオシャレ作文を紹介する。
【今日の天気と私】
ザーザーザー。窓の外から雨の音が聞こえる。私は心がモヤモヤしていた。昼休みに思わぬことが起きた。外が晴れていたのだ。心が熱くなった。「これで鉄棒ができるぞ。」思いっきり駆け出した。風が気持ちよかった。(鉄棒で大技ができるかもしれない。)心が晴れ晴れしていた。
↓天気の変化と気持ちを重ねている。雨の音から始まり、心が晴れ晴れとして終わる対比が見事である。
【避難訓練】
リリリリリ！サイレンが鳴った。いつものサイレンの音と違うから、「びく…」として、本物の

避難訓練だと思った。ちよつと怖い。でも、本物の火事だったら焦っちゃだめだ！と思った。地面はガタガタしている。僕は急いで運動場に突っ込んだ。心の中はソワソワしていて、教頭先生や校長先生のお話はあんまり聞こえなかったけど、がんばって聞いた。これからも真剣に避難訓練をしたい。
↓音から始まり、地面の揺れ、運動場に突っ込むという表現、今後の決意まで書ききっている。
【緊張した音楽会】
私が私じゃないみたい。はあはあ。暑い。汗が下に向かっていく。体育館の中に足を踏み下ろすと、ドキッ、一時停止みたい。心が震えていて、頭が真っ白になり、凍るようなカキーンとなる。どうすればいいのかわからない。合奏が終わって教室に戻ると、安心したようにすーっと緊張が抜けていき、ふつと息を吐いた。そうすると、練習のことを思い出した。あゝそんなことがあったなあと思いがんばりました。先生の「みなさん、よくがんばりました。」という言葉が聞くとうれしくなった。来年も合奏やいろいろなことの練習を積み重ねていって、すてきな音楽会になるようにがんばりたい。
↓様々な表現で緊張と緩和が伝わる。あえて合奏中の表現が少ないのも、スピード感があって良い。
作文の型と技を知った子どもたちの自由な表現は、とてもユニークでこちらの予想を超えてくる作品も生まれる。今後も子どもたちと楽しみながら、書く活動と向き合っていきたい。
(東近江市立能登川南小学校)

「俳句を通して
言葉をあじわう」
少徳 信

6月号で書いた季語探しの後、それぞれの子が持ち寄った句をもとに句会を開いた。ここでは子どもたちの作品とそれに対する子ども達の交流の様子を紹介する。

① 〈春の星 ヨット静かに
帆をたたみ〉

作者曰く、春の星という季語がお気に入り、ぜひ使ってみようと思っていたよう。春の星↓空↓広い↓海↓ヨット↓…と連想を進めていったとのこと。満天の春の星が広がる海を、穏やかに時間が流れるいかにも春らしい句である。

- C1 「子ども達の会話である。以下、子ども達の会話である。」
- C2 「春の星とヨットって関係ない？ どういう意味か、いまいちわからへん」
- C3 「ヨットやからいいんやで。大きい船やったら、どっちかって言ったら 夏の星な感じがするもん」
- C4 「帆をたたみ、は？」
- C5 「もう夜になつて、そこで寝ようと思うからたたんだかなって思った！」
- C6 「なるほどな、私は帆をたたんだから向こうまでつづく星が見えたのかなって思ったわ」
- C7 「そう思うと、『静かに』ってめっちゃいいな」
- C8 「うん。星が春らしく見える」

C1 「みんなの話聞いてると確かに良い句に見えてきたわ」
作品② 〈へすべり台〉

落ちて笑って 夏の空
〈友達と 遊具で遊ぶ 夏の空〉
をより具体的にのびていくなかで生まれた句。「落ちて笑って」のリズムと 夏の空の明るさが良く響き合う句である。子ども達の会話は以下の通り。

- C4 「ぼくも小さいときこんなことあったわ」
- C5 「落ちて笑っていい」
- C6 「何回でも読みたくなる感じするもん」
- C7 「なんで 夏の空なんやろ」
- C8 「落ちたとき 仰向けになって、そのとき空が見えたんじゃない？」
- C9 「そっか。遊んでる楽しさもなんかわかるなあ」
- C10 「最後に夏の空が来るから、気持ちいい感じで終わるな」

このように 子ども達が句を味わう中で、口々に言っていたのが「季語ってあった方が面白い！」。「季語がわかってくると句のイメージがめっちゃ広がるなあ」といった言葉だった。

言葉は 字面だけで味わうものではない。様々な情報が圧縮された数々の言葉を、自分の感覚を通して広げること、より豊かに世界を味わうことができると思う。そんな言葉との出会いをこれからも 子ども達に提供できるようにしていきたい。

(彦根市立河瀬小学校)

「比べる」ことで
工夫を読む
谷口 映介

中学年以降の読むことでは文章を「比べる」ことが必要となる。学習指導要領では、「知識及び技能」(2)情報の扱い方に関する事項・情報の整理イにおいて中学年から「比較や分類の仕方」が示されている。ここで言う比較とは、「複数の情報を比べる」ことである。説明的な文章においては、①理由や事例の取り上げ方、②筆者の主張、③図表などの使い方等等がある。比べることを通して、書き手の工夫を捉えることになる。今回は、「ほけんだより」を読みくらべよう(東京書籍三年上)で実践をした。

一、お便りに込められた意図
導入として、校内で発行されているお便り(通信)を数種類提示し、どんな願いが込められているか話し合った。児童からは、「学校通信では、校長先生が全校のみんなの頑張りを家の人に伝えたいと考えておられると思います。」「保健だよりには、みんなが健康に生活してほしいという思いが込められていると思います。」という考えが次々と出された。その上で、学習で比べる「大森先生の二つの文章(保健便り)」を導入し、児童は、「大森先生の思いに共感し、読み比べることへの意欲を持つことができた。」

二、複数の情報を「比べる」
学習では、先述した三つの観点から比べることになる。比べる際の手立ては、大きく次の四つである。
①二つの文章を縦に並べたシート
②段落分け(はじめ・中I・中II・終わり)・全体の組み立ての確認
③色分け(同じところ(赤線)違うところ(青線))
④繰り返されている言葉(緑)で囲う。伝えたいことの違いへ

- ④ 図と文が対応しているところを線で結ぶ。
 - ⑤ 図表やアドバイスの言葉を短冊に入れ替え、違いを話し合う。
- 児童は、色分けをしながらかんづきを書き込んだり、表に整理したりする中で書き手の工夫を発見することができた。学習を進める中で、「どちらにもそれぞれ良さがあることに気付きました。一つ目は、朝ご飯を食べるよさが図と一緒に書かれています。二つ目は、身近な例が書かれていたり、数字が入ったりしています。どちらがいいか迷ってきました。」という考えが出された。この後更に話し合うと、どちらが正しいかではなく、文章を「誰に向けて」「どんな場合に」書くかが大切であることに意識を向けることができた。
- 前単元の「自然のかくし絵」で見つけた筆者の書き方の工夫と共に教室に掲示しておくことで、自分で説明文を書き際に使えるポイントとして大切にしたい。

(竜王町立竜王小学校)

校内研究
「考えることを
楽しむ児童の育成」
蜂屋 正雄

北野小学校では、題のようなテーマで、昨年度までは理科を、今年度からは国語科を切り口として研究を進めている。蜂屋自身は今年度より担任を外れた、研究主任をいただき研究を進めることとなった。

昨年度は、問題解決場面の「予想」や「考察」の場面を取り上げ、児童一人ひとりが共通の課題に対して自分の考えを持つこと、賛成や反対の立場を明確にして意見を交流する中で、実験方法を考えたり実験結果と自分の予想から考察したりすることで「考えることを楽しむ」ことができた。一方で、目の前に実物や現象があるにもかかわらず、問題意識が共有できない、自分の考え(「予想」や「考察」)が持てないという場面も見られた。

今年度は、昨年度弱さを感じた、児童一人ひとりが考えを持つこと、持った考えを自分の言葉で表現することを国語科で研究している。テキストに対して自分がどう問題意識を持ち、考えたかを書き残したいと考え、副題を、教材文の叙述を元に自分の考えを交流することができると国語科の授業づくりとした。

今年度研究を始めるにあたって、研究推進委員の中から出てきた声は「国語科の教材研究の仕方基礎から学びなおしたい。」と

いうものであった。そこで研究会では、まず、「三色ボールペンで読む日本語」(齋藤孝)を使って、本文に線を引きながら読み、なぜ、そこに線を引いたのかを考えることを体験してもらった。その後、教材文を根拠に考えを持つ姿のモデルとして、ビブリオバトル(書評合戦)で自分の感じた本の良さを発表する姿を見てもらった。また、滋賀県総合教育センターに学校サテライト研修で講師派遣を依頼し、国語科の教材研究の仕方として一回、国語科の指導要領の活用と指導案の書き方として一回、また、「学ぶ力向上訪問」で滋賀県の指導主事に一回、CBT事業による滋賀県指導主事派遣で一回の計四回の研修、指導助言を計画している。

研究授業は全学年で予定しているが、第一回の研究授業として、五年生の「カレライス」(光村図書)を行った。指導案を作る前に

- 教材文の特性をいかすこと。
- 自分の考えを明確にするための手立て(書く・線を引くなど)をスキルとして示すこと。
- 教材文でつきたい資質能力を明確に示し、年間指導計画を入れること。
- B評価を共有し、C評価の子がBになる手立てを書くこと。

教材文の特性について「カレライス」は、以前は六年生の物語教材となっていた作品であるが、今は五年生の読書教材となっている。高学年であれば、「その気持ちわかる」というポイント

がいくつもある作品であり、教科書では重松清さんのほかの本を読むなど、読書の幅を広げるとい位置づけである。今回はこの作品の「良さ」を見つけ交流し、みんなで見つけた良さを六年生に紹介し感想をもらおうという実践。つけたい資質能力としては、知識理解・読書ではなく、思考力・判断力・表現力の読むことの実践とした。

読みの手立てと年間計画
 大事だと思うところを線を引く
 学習を前教材の「名前つけてよ」「見立てる」「言葉の意味が分かること」でも行い、線を根拠に話し合うという考えを持つ手立てが定着していた。

しんどい児童への手立て
 繰り返し学習と交流をしてから自分の考えを決めることができ学習展開によって、考えを持ちづらい児童も言葉にできていた。

また、全文揭示に「良い」と思ったところにシールを貼ることで、自分の考えと友だちの考えが一望できる工夫がされていた。成果の一方で児童が線を引いた「良さ」を交流することによって、学習を深める過程が課題となってきた。単元当たりの時数が減る中で、つけたい資質能力を絞り、自分と友だちの考えを教材文の良さにつなげる教師の言葉かけの難しさを感じた。

指導主事の先生方からは、ゴールの持たせ方やモデルの提示、読み解く力といったキーワードも教えていただいた。児童と学びを深めながら教師の授業力も高めていきたい。

(野洲市立北野小学校)

編集後記

▼七月例会(第四八四回)

案の交流を行いました。提案の概要は次の通りで▼岡嶋大輔さんは「たずねびと」(5年)の授業づくりを提案。「はじめ」と「終わり」とを比べて、中心人物の心情が「どこで(何によって)大きく変わったのか、それは「どのようになつたのか」を視点にして読むむなど授業改善に向けて①物語の全体をとらえる・②考えたことを③伝えたい内容について指「学びへのいざない」を教材にして具体的示しました。▼海東貴利さんは、安曇小学校研究主題「実生活に生きて働く子ども」を「力」を育む授業づくりの取り組みを提案。研究内容として「児童の実態から付けたい力を「自分の思いや考えが明確になるように、文章の構成を考える力」「自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫する力」を設定。詳しい研究内容を示された▼北川雅士さんは、教務主任の立場からの一学期の実践の報告。掲示板活用を例に学校の言語環境の充実の取り組みは次の通り。月の名前と和風月名、その月の二十四節気の紹介②国語科の教科書におけるその月の学習内容からビックアップした教材の紹介③漢字の広場や言葉に関するクイズ④俳句大会など全校での取り組み充実していた多彩▼紙面の都合で紹介は出来ませんでした。都員が一学期の取り組みを提案し、各自で読むという充実したメロル活用の実践の交流から玉稿をいただきました。深謝。

(吉永幸司)